

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	ふれあい活動による里地里山生物への理解促進
手法名	やんばるの森におけるツバキを軸にした里山ふれあい活動づくり
主体	NPO法人大宜味つばきの会
背景(地域の課題)	<p>沖縄県大宜味村のやんばるの森は、石灰岩質の地質を特徴としており、かつては薪炭林などに利用され里山的景観を形成していた。しかしその後利用されなくなり奥山化しつつあったが、ツバキの群生地が発見されたことを受け、NPO団体が立ち上がり保護と新たな活用策が模索されている。</p> <p>かつて利活用していた里地里山環境を、希少種等の発見を機に新たな利活用を模索する動きは全国各地でみられるため、本事例はそのモデルとして着目されると考えられる。</p>
手法／方策の詳細	<p>NPO法人大宜味つばきの会では、やんばるの森におけるツバキ保護と増殖の取り組みを軸にしながら、交流、体験、イベントなど各種活動を展開している。</p> <p>(1) 散策道を軸とした森林のふれあい活動の展開(図1) ツバキの森で来訪者が森にふれあえるよう次の取り組みを行っている。</p> <p>① 散策道作り 階段整備や石の敷設などを行うなど散策道整備を実施。石や木材などの必要資材等は現場から産出されるものを工夫して使うなどしている。</p> <p>② 森林内を明るく保つ活動 除間伐等を行い、森林内を明るく保てるよう手入れ作業を実施。</p> <p>③ 各種体験活動の実施 散策会やツバキの観賞会など各種の体験活動をプログラムしている。</p> <p>(2) ツバキの保護増殖活動 ツバキをはじめとする自生木の種を拾って苗を育て植栽し増殖を図るとともに販売を行ったり、交流活動を実施する。</p> <p>① 母樹調査、苗づくり、植樹、見本園づくり等の活動(図2・3)</p> <p>② 外部との交流や地元と連携した取り組み促進のネットワークを構築</p> <p>(3) 人材育成 会のメンバーは案内やインストラクターとして活動しているが、そうした知識や技術を次につなげるためのガイド養成や普及広報活動を合わせて行っている(図4)。</p> <p>① ガイド養成</p> <p>② 普及広報活動の実施</p> <p>(4) 普及啓発 普及啓発事業として年1回NPOが主体となって「大宜味つばき祭り」というイベントを開催している。</p>
手法・技術的視点	<p>(1) 生き物をシンボルにした保全活用活動の広がり 当事例はツバキの保護増殖活動を契機にしているが、特定種の活動だけに留まっていない。専門知識を活かしながら、多様な保全活用活動に展開していくように事業を誘導している点が着目される。</p> <p>(2) 他団体とのネットワークと人材育成 地域の他の活動団体ともネットワークを構築しながら、高齢化しつつある会構成員のガイドのノウハウなど知識や技術を教え伝える取り組みを行っている。</p> <p>(3) 交流と地域活性化の視点 村外の来訪者が散策道や各種の観察・観賞施設など、活動フィールドを楽しめる工夫が会の取り組みの中でなされている。また地域の他の活動にも来訪者が参加できるプログラムが構築されており、交流と地域活性化が仕組まれている。</p>

<p>実行プロセス・運営体制のイメージ</p>	<p>活動展開のプロセス</p> <p>活動の構成内容</p>
<p>図・写真資料</p>	<p>図1 活動のフィールド: 石灰岩の山とツバキの森 ①チキガンドウ(権鐘堂)と落葉樹シマタコ林 ②ボウジムイ(坊主森) ③散策道が巡る ④ボウジムイからヤンバルの山並と東シナ海を眺める</p> <p>図2 調査・保護 ①森の調査、母樹調査 ②実生の調査:ヒメサザンカ ③開花調査:形質記録 ④蝶など専門家による生きもの調査も</p> <p>図3 森の入口に見本圃を育成 ①沖縄樟協会の応援 ②防風ネットを設置して風・寒さ・乾燥から苗を守る ③初期には草刈りをして雑草を除去 ④今ではヒメサザンカも立派に</p> <p>図4 人材養成、普及・広報 ①苗の育て方講習 ②ガイド講習 ③会報や案内冊子、計画や教材 ④新聞や雑誌の取材</p>
<p>参考資料</p>	<p>里なび研修会in沖縄パワーポイント資料(宮城弘氏)</p>